

|||||
 原著論文
 |||||

スポーツボランティア活動が体育会系部活動所属学生の 気分状態に与える心理的影響

— ボランティアスタッフの満足感に着目して —

元 嶋 菜美香*, 宮 良 俊 行, 熊 谷 賢 哉
 金 相 勳, 田 井 健太郎

(長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科、*連絡対応著者)

Psychological Effects on Sports Activity Volunteers Belonging University Sports Club: Focusing on Satisfaction

Namika MOTOSHIMA*, Toshiyuki MIYARA, Kenya KUMAGAI,
 Sanghoon KIM and Kentaro TAI

(Department of International Tourism, Faculty Human and Social Studies,
 Nagasaki International University, *Collaborative Authors)

Abstract

The purpose of this study was to examine the effects on the moods of volunteer activity participants and what factors effected their satisfaction. We investigated 38 students who belong to sports clubs in universities who volunteered for a sports event at Nagasaki International University using the Scale of volunteer's Motivations, Two-Dimensional Mood Scale, Functionally Relevant Benefits Scale and Volunteer's Satisfaction Scale.

When the measured scores before and after sports event participation were compared, the "vitality level" ($p < .05$) and the "degree of pleasure" ($p < .05$) increased significantly, suggesting that mood of volunteers improved and became more positive.

Moreover, we calculated a correlation between the Volunteer's Satisfaction Scale and the 2 other scales, mood after the activity measured by Two-Dimensional Mood Scale ($r = 0.54, p < .01$) and Functionally Relevant Benefits Scale ($r = 0.30, p < .10$) effected the satisfaction of the volunteers who belong to sports club in universities.

Key words

sport volunteer, psychological effect, satisfaction, mood

要 旨

本研究では、スポーツボランティア経験が活動に従事したボランティアスタッフの気分状態に与える影響および活動後の満足感におよぼす影響を明らかにすることを目的とした。長崎国際大学にて開催されたスポーツイベントにスポーツボランティアとして従事した体育会系部活動所属学生38名を対象とし、ボランティア参加動機尺度、二次元気分尺度、ボランティア活動から得た利益尺度、ボランティア活動満足度尺度への回答を求めた。スポーツボランティア活動前後の二次元気分尺度得点を比較した結果、活動前後に「活性度」および「快適度」($p < .05$)の得点が有意に向上し、スポーツボランティアに従事した体育会系部活動所属学生の気分状態がスポーツボランティア活動を通じて良好な状態へと改善されたことが示された。満足度尺度得点と3つの尺度との相関係数を算出した結果、活動後の気分状態 ($r = 0.54, p < .01$) およびボランティア活動から得た利益 ($r = 0.30, p < .10$) がスポーツボランティアに従事した体育会系部活動所属学生の満足感に影響を及ぼすことが明らかとなった。

キーワード

スポーツボランティア、心理的効果、満足感、気分状態

1. 緒 言

スポーツへの関与は「するスポーツ」「みるスポーツ」「ささえるスポーツ」に分類され¹⁾、オリンピックなどの大規模スポーツイベントでは、アスリートの活躍はもちろんのこと、スポーツボランティア活動への関心が高まっている。「東京マラソン2014」では36,000人のランナーに対して10,000人のスポーツボランティアが募集され、約2日でボランティアの募集定員に達したことから、「ささえるスポーツ」に位置づけられるスポーツボランティアの人気の高さがうかがわれる²⁾。

スポーツボランティアは1990年代中頃に登場した概念であり³⁾、「地域におけるスポーツクラブやスポーツ団体において、報酬を目的としないで、クラブ・団体の運営や指導活動を日常的に支えたり、また、国際競技大会や地域スポーツ大会などにおいて、専門的能力や時間などを進んで提供し、大会の運営を支える人」⁴⁾、「「スポーツ」という文化の発展のために金銭的報酬を期待することなく、自ら進んでスポーツ活動を支援する人」⁵⁾と定義される。これらの定義は、ボランティア活動の基本である「自発性」「無償性」「社会性」を根底としており、今やスポーツイベントを開催する際にはスポーツボランティアの協力が不可欠となっている。

大規模なスポーツイベントのボランティアが注目される一方で、地域住民がスポーツボランティアとして地域のスポーツイベント活動に参加することによる地域づくりや地域活性化が期待されている⁵⁾。大規模スポーツイベントや地域のスポーツイベントをきっかけにスポーツボランティアに参画した人々が、地域の日常的なスポーツ現場のボランティアにも活動の場を広げていき、スポーツ以外の街づくりにも関与する「スポーツボランティアの好循環」⁶⁾が提言されるなど、スポーツボランティアは地域のスポーツイベントの開催に必要不可欠であるとともに、その後の継続や活動拡大が注目されている。

ボランティア活動への関心の高まりとともに、

ボランティアの参加動機、ボランティア活動から得た利益、ボランティア活動への満足感といったボランティア活動従事者の個人特性が注目されている⁷⁾。ボランティア活動への評価がボランティア活動従事者の満足感に影響し⁸⁾、満足感が高いほどボランティア活動の継続意志に強い影響を与えることが明らかとなっており⁹⁾、ボランティア活動への参加促進やボランティアの組織化を図っていく上で有用な指針を提供している⁷⁾。しかし、「するスポーツ」では活動後の気分状態が満足感に影響すること¹⁰⁾、「みるスポーツ」では観戦後の感情が満足感に影響すること¹¹⁾が報告されているにも関わらず、「ささえるスポーツ」における気分状態と満足感との関係は明らかにされていない。また、一過性の身体活動実施前後の気分状態の変化を測定した研究¹²⁾¹³⁾が多く見られるにも関わらず、スポーツボランティアに関する研究の多くは活動後の満足感や評価について調査を行う¹⁴⁾、過去のスポーツボランティア経験を想起させ心理的効果を検討する¹⁵⁾¹⁶⁾にとどまり、スポーツボランティアという一過性身体活動が有する心理的効果に関する研究は不十分である。

さらに、スポーツボランティアに関する先行研究では多くが一般参加者を対象としており¹⁷⁾、スポーツを専門的に行う大学生のデータは少ない。スポーツボランティア経験は、普段はスポーツをする視点で活動をしている体育会系部活動所属学生がささえる視点への移動を内的に経験する可能性を有する¹⁸⁾¹⁹⁾ことから、体育会系部活動所属学生の心理状態がスポーツボランティア経験を通してどのように変化するのか、どのような要因がスポーツボランティアの満足感に関係するかを明らかにすることは重要である。

以上を踏まえて、本研究ではスポーツボランティア活動が体育会系部活動に所属する大学生の気分状態に与える影響を明らかにし、スポーツボランティア活動の満足感に関係する要因を検討することを目的とした。

2. 方法

(1) **対象者** スポーツボランティアに従事した大学生47名（男子27名・女子20名、体育会系部活動所属学生40名・文化系部活動所属学生1名・未所属学生6名）のうち、長崎国際大学にて体育会運動部もしくは体育会サークルとして登録されている部活動（以後、体育会系部活動とする）に所属し、すべてのデータに欠損のない38名を分析対象とした。

(2) **手続き** 2014年12月14日(日)に長崎国際大学にて開催されたスポーツイベントにボランティアとして参加した大学生に対して、イベント実施前後にアンケート調査を実施した。具体的なスポーツボランティア活動は、会場設営、スポーツ用具の準備・運搬、スポーツ指導補助、受付・案内、駐車場整備、昼食調理・配布などであった。学生の配置は、事前に担当教員が参加学生の適性および希望を考慮し配置した。イベント開催日までに、スポーツ指導補助学生を対象として指導方法および大会運営に関する講習会を実施した。

(3) 調査内容

1) フェイスシート

性別、学籍番号、所属部活動、スポーツボランティア経験について回答を求めた。これまでのスポーツボランティア経験については、具体的な活動内容を自由記述で求めた。

2) スポーツボランティア参加動機尺度

スポーツボランティア活動への参加動機の測定には、8因子29項目からなるスポーツイベントの参加動機尺度¹⁷⁾を援用した。因子負荷量が0.5以上である20項目のうち、今回のボランティア活動に直接関係しない「障害者に関心がある」を除いた19項目を採用した。また、2項目とも因子負荷量が0.5を越えていない第8因子については、より因子負荷量の高い1項目を採用し、計20項目を使用した。スポーツイベント実施前に、「今回のボランティアに参加した理由は、

以下の項目にどの程度当てはまりますか」という質問に対して「1：全くあてはまらない」～「5：非常にあてはまる」の5件法で回答をもとめた。

3) 二次元気分尺度

ボランティア活動従事者の気分状態の測定には、2因子8項目からなる二次元気分尺度²⁰⁾を使用した。スポーツイベント実施前後に、「今のあなたの気持ちは、以下の言葉にどれくらい当てはまりますか」という質問に対して「0：全くそうではない」～「5：非常にそう」の6件法で回答をもとめた。また、「活性度」および「安定度」の2因子の得点から「快適度」（-10：不快～10：快適）を算出した。

4) ボランティア活動から得た利益尺度

ボランティア活動から得た利益の測定には、5項目からなるボランティア活動から得た利益尺度²¹⁾の日本語翻訳版⁷⁾を使用した。スポーツイベント実施後に、「今回のボランティア活動をどのように感じましたか」という質問に対して「1：全くあてはまらない」～「7：非常にあてはまる」の8件法で回答をもとめた。

5) ボランティア活動満足度尺度

ボランティア活動の満足感の測定には、3項目からなるボランティア活動満足度尺度²¹⁾の日本語翻訳版⁷⁾を使用した。スポーツイベント実施後に、「今回のボランティア活動をどのように感じましたか」という質問に対して「1：全くあてはまらない」～「7：非常にあてはまる」の8件法で回答をもとめた。「ボランティア活動は、私にとって何も得るものはないと思う」は逆転項目であり、分析の際は得点の処理を行った。

(4) 分析の手順

統計的検定には統計処理ソフト SPSSver. 22を使用し、有意差検定として χ^2 検定、 t 検定、一元配置分散分析、相関検定としてPearsonの相関係数を算出した。有意差が認められた場合 post hoc test として Bonferroni 補正による多

重比較を行った。有意水準は危険率5%未満とした。

(5) 倫理的配慮

対象者に対して、調査実施前に調査内容およびデータの使用方法等を書面および口頭にて説明し、同意書への署名をもって本調査への参加の承諾を得た。

3. 結果および考察

(1) スポーツボランティア従事者の特性

対象者のうちスポーツボランティア経験者は30名、未経験者8名であり、カイ二乗検定を行った結果、有意にスポーツボランティア経験者が多かった ($\chi^2=12.74$, $df=1$, $p<.001$)。これまでに経験したスポーツボランティアの活動内容(複数回答可)は、総合型地域スポーツクラブと本学が共催しているスポーツフェスタ(6名)、長崎がんばらんば国体(10名)、本学で開催している地域の小学生を対象としたスポーツ教室(8名)、その他スポーツ指導や大会運営補助(10名)であった。

過去1年間のスポーツボランティアの実施率は1994年から約6~8%を推移し、2014年度の調査では20代のボランティア実施率が5.9%であったことと比較すると²²⁾、本研究の対象者は体育会系部活動に所属し日常的にスポーツを行い、かつスポーツボランティア活動にも積極的に取り組んでいることが示された。

(2) スポーツボランティア活動の参加動機

先行研究¹⁷⁾を参照し、ボランティア参加動機尺度の各因子の合計得点を因子内の項目数で除し、各因子の平均値を算出した(表1)。各因子の平均値をもとに、8つのボランティア参加動機因子を要因とする一元配置分散分析を行った結果、有意差が見られた($F(7.259)=5.30$, $p<.001$)。下位検定の結果、「スポーツ活動」因子が「選手支援」($p<.05$)、「レクリエーション」($p<.01$)、「自己表現」($p<.001$)、「報酬」($p<.01$)因子の得点よりも有意に高いことが示された。「スポーツ活動」は「スポーツ活動を支援したい」などの項目から構成される因子であり、本研究の対象者がスポーツ活動自体への興味・関心からスポーツボランティア活動に動機づけられたことが示された。

障害者スポーツイベントにおけるボランティア参加動機について調査を行った先行研究¹⁷⁾と比較すると、「自己実現」および「選手支援」因子の得点が低かった。先行研究では知的障害者スポーツイベントに参加したボランティアを調査対象としていることから「選手支援」因子の得点が高い一方で、今回の研究では地域住民を対象としたため先行研究に比べ選手(参加者)への支援を参加動機とした対象者が少なかったのではないかと考えられる。一方で、先行研究に比べ「レクリエーション」、「スポーツ活動」、「自己表現」因子の得点が高かった原因として、対象者の多くが日常的にスポーツに参加しており、リラクセーション因子の項目にあるように「スポーツボランティア活動が気分転換になる」

表1 本研究および先行研究¹⁷⁾におけるボランティアの参加動機尺度の因子平均と得点差

		自己実現	社会貢献	選手支援	レクリエーション	依頼	スポーツ活動	自己表現	報酬
本研究	Mean	3.73	3.85	3.60	3.38	3.38	4.07	3.50	3.26
	SD	0.83	0.91	0.82	0.81	0.98	0.83	0.92	1.11
	得点差	-0.39	-0.01	-0.33	1.10	1.66	0.57	0.78	1.52
先行研究	Mean	4.12	3.86	3.93	2.28	1.72	3.50	2.72	1.74
	SD	0.71	0.76	0.77	0.92	0.81	0.95	0.85	0.81

ことを経験的に理解していたためであると推測される。スポーツボランティアの参加動機の特徴として、本人の「スポーツ好き」が根底にあり、「社会的に認められたい」などの自己への期待という潜在意識の薄さが挙げられており¹⁸⁾、本研究の対象者も自分自身がスポーツを愛好し、「スポーツ活動を支援したい」という意識が参加を動機づけたと考えられる。また、「依頼」および「報酬」因子の得点が先行研究の平均値と比べ高いことは、対象としたスポーツイベントの運営に際して大学教員が体育会系部活動所属学生を中心にスポーツボランティアへの従事を依頼したことを示している。地域で開催されるスポーツイベントの運営には、スポーツに関する知識を有すること、日常的にスポーツボランティア活動に従事していることなどから近隣大学の体育会系部活動に所属する学生がスポーツボランティアの依頼を受けるという地域スポーツイベントの実情を示した結果であるといえる¹⁹⁾²³⁾。

(3) スポーツボランティア活動前後の気分変化

スポーツボランティア活動前後の二次元気分尺度得点を算出し、対応のあるt検定を行った結果、活動後に「活性度」($t=2.63, df=37, p<.05$)の得点が有意に向上した(表2)。また、「活性度」および「安定度」得点から算出される「快適度」($t=2.44, df=37, p<.05$)の得点が活動後に有意に向上した。この結果から、スポーツボランティア活動に従事した体育会系部活動所属学生の気分状態がスポーツボランティア活動を通じて良好な状態へと改善されたことが示された。

スポーツボランティアはスポーツが本来的に持っている爽快感を含有しており²⁴⁾、スポーツボランティア参加動機の1つとして「気分転換」が挙げられる²⁵⁾²⁶⁾、活動後の感想として「気持ちよさ」「爽快感」が挙げられる¹⁹⁾など心理状態への効果が期待されていたが、これまでスポーツボランティアの活動前後の気分状態の変化に

ついて検討されたことはなかった。スポーツボランティア活動へ従事することで運動やスポーツを行ったときと同様に「活性度」得点が向上し、気分状態が良好に改善されたことから、スポーツボランティアの有する心理的効果の一部を示すことができたと考える。

表2 ボランティア活動前後の二次元気分尺度の平均値

		Mean	SD	p
活性度	pre	2.71	4.25	<.05
	post	4.84	3.73	
安寧度	pre	4.87	3.59	n.s.
	post	5.58	2.71	
快適度	pre	7.58	7.07	<.05
	post	10.42	5.49	

(4) スポーツボランティア活動から得た利益

ボランティア活動から得た利益尺度の5項目を要因とする一元配置分散分析を行った結果、有意差が見られた($F(4.148)=7.10, p<.001$)。下位検定の結果、「達成感」が「価値の表現」($p<.05$)、「知識の習得」($p<.05$)、「活動の評価」($p<.001$)、の得点よりも有意に高かった。「達成感」は「ボランティアによって達成感を得た」という項目であり、若者がボランティア活動を通して得られる成果として挙げられている¹⁶⁾ことから、対象としたスポーツボランティアにおいても一般的なボランティア経験と同様の利益が得られたことが示された。

一般地域住民ボランティアを対象とした先行研究⁷⁾と比較すると、「役立つ技術」以外の全ての得点が低かった(表3)。「役立つ技術」は「ボランティア活動によって、将来役立つ技術を学ぶことができた」という項目であり、今回対象とした体育会系部活動所属学生が専門的にスポーツに取り組んでいることから、先行研究に比べスポーツに関する職業を希望している可能性が高く、今回のスポーツボランティア経験が将来役立てられると感じられるような内容であったことを示していると考えられる。しかし、「役立つ技術」以外は先行研究に比べ得点が低く、

表3 本研究および先行研究⁷⁾におけるボランティア活動から得た利益尺度の平均と得点差

		価値の表現	達成感	知識の習得	活動の評価	役立つ技術
本研究	Mean	3.89	4.48	4.15	3.54	3.96
	SD	0.91	1.03	0.98	0.95	1.10
	得点差	-0.50	-0.21	-0.89	-0.80	0.19
先行研究	Mean	4.39	4.69	5.04	4.35	3.76
	SD	2.97	2.80	2.31	2.75	3.23

表4 本研究および先行研究⁷⁾におけるボランティア活動満足度尺度の平均と得点差

		有意義	与えられる責任に対する満足	無意味(逆転項目)
本研究	Mean	4.50	4.39	4.33
	SD	0.89	1.01	2.04
	得点差	-0.62	-0.43	-1.13
先行研究	Mean	5.12	4.82	5.46
	SD	2.61	2.60	3.21

「価値の表現」、「知識の習得」、「活動の評価」については得点差が開いた。「価値の表現」は「ボランティア活動によって、自分の価値を表現できた」、「活動の評価」は「自分のボランティア活動が高く評価された」という項目であり、今回対象としたスポーツイベントが参加者・イベント運営者・スポーツボランティアを含めて100名程度とそれほど大きな規模ではなかったことから、第三者に自分のボランティア活動を評価されるような場面が少なかったのではないかと推測される。また、「知識の習得」は「社会について新しいことを学んだ」という項目であり、対象者の多くが既にスポーツボランティアを経験していたことから今回のスポーツボランティアに目新しさを感じなかったのではないかと考える。

(5) スポーツボランティア活動後の満足感

ボランティア活動満足度尺度の平均値を算出し、一元配置分散分析を行った結果、ボランティアの満足度得点に有意な差はなかった。一般地域住民ボランティアを対象とした先行研究⁷⁾と比較するとすべての得点が低く、先行研究に比べ本研究の対象者が活動への満足感を得られな

かったことが示された(表4)。ボランティア満足度の構成要素として「大会への評価」と「对人的評価」が挙げられるが、先行研究にくらべ「必要情報の提供」「大会運営」「事前説明・講習会」などの大会や活動内容を低く評価したり、「参加者との交流」などのコミュニケーション不足を感じた従事者が多かったためにスポーツボランティア活動への満足感が得られなかった可能性が推測される²⁷⁾²⁸⁾。

大学生を対象としたスポーツボランティア活動への不満として「何か仕事があった」という仕事量の少なさが挙げられ、活動内容と大会運営の検討、大学が行うべき「スポーツボランティアがイベントに果たす意義」に関する教育不足が指摘されている²⁸⁾。今回対象としたスポーツイベントでは、スポーツ指導補助を担当する学生を対象とした事前講習会を行ったものの、その他のスポーツボランティア活動を担当した学生については事前指導を行っていない。その結果、スポーツボランティアの意義に関する理解が不足した状態で活動を行い、「有意義さ」や「ボランティアの役割によって与えられる責任への満足」といった満足感を感じる事ができなかったと推測される。

(6) スポーツボランティア活動の満足感に影響を与える要因

ボランティア活動の満足感との関係性を検討するために、ボランティア参加動機尺度、ボランティア活動から得た利益尺度、二次元気分尺度のそれぞれの尺度の合計点とボランティア活動満足度尺度の合計得点との相関係数を算出した(表5)。先行研究¹¹⁾ではボランティア活動から得た利益や感情が満足感の先行要因であるという前提²⁹⁾のもと重回帰分析を用いて分析を行っているが、満足感が気分状態の先行要因であるとする文献³⁰⁾が散見されたため、本研究では気分状態と満足感の関係性を示す尺度間のPearsonの相関係数を算出した。

尺度間の相関係数を算出した結果、活動後の気分状態である「快適度」得点と満足感尺度の間に有意な相関があり($r=0.54, p<.01$)、ボランティア活動から得られる利益と満足感の間に有意傾向が見られた($r=0.30, p<.10$)。活動後の気分状態が良好であるほど、またボランティア活動の利益を実感している従事者ほど高い満足感を感じていることが示された。ボランティア活動から得られる利益が満足感に大きな影響を与えることが報告されているが⁷⁾、本結果からボランティア活動から得た利益を明確に実感せずとも、活動後の気分状態が良好であると感じた従事者はスポーツボランティア活動への満足感が高いことが示された。また、活動後の気分状態と活動から得た利益の間に有意な相関があり($r=0.46, p<.01$)、活動によって何らかの利益を得ることができたと感じた従事者は活動後の気分状態が良好であることが示された。

一方で、ボランティア参加動機は満足感に有意な相関を持たなかった。参加動機は満足感に直接関係せず、ボランティア活動から得た利益を経由して間接的に満足感に影響することが明らかとなっており⁷⁾¹⁰⁾、本研究でも参加動機と活動から得た利益の間に有意な相関が見られたが($r=0.45, p<.01$)、参加動機と満足感の直接的な関係性はみられなかった。参加時の動機は何であれ、活動後に気分状態が良好に改善され、活動から得た利益を実感した従事者は満足感が高いことが示された。

4. 総合考察

本研究は、スポーツボランティア活動が体育会系部活動に所属する大学生の気分状態に与える影響を明らかにし、スポーツボランティア活動の満足感に関係する要因を検討することを目的とした。調査の結果、スポーツボランティア活動を通して体育会系部活動所属学生の気分状態が良好な状態に改善したこと、活動後の気分状態と満足感との間に相関があることが示された。これまで「ボランティア活動から何を得たと感じるか」といった活動への評価に焦点があてられていたが、活動から得た利益よりも活動後の気分状態が満足感に関係することが明らかになったことで、スポーツボランティア従事者が具体的な利益を実感できるような活動であると同時に気分状態が良好に改善されるような工夫をする必要性が確認された。

しかし、ボランティア活動から得られる利益尺度得点および活動満足度尺度得点が先行研究に比べ低かったことは、スポーツボランティア

表5 ボランティア参加動機尺度、ボランティア活動から得た利益尺度、二次元気分尺度の合計点とボランティア活動満足度尺度合計点との相関係数

	Mean	SD	参加動機	快適度	活動から得た利益	満足感
ボランティア参加動機	72.66	11.89	—	.078	.449**	.127
ボランティア活動後の気分状態	10.42	5.49		—	.458**	.540**
ボランティア活動から得た利益	20.00	3.83			—	.295†
ボランティア活動満足感	13.24	2.53				—

Pearsonの相関係数 ** : $p<.01$, † : $p<.10$

をマネジメントする上で重要な改善点を示している。ボランティアの継続意志には活動後の満足感が大きく関係し、マネジメントの工夫でボランティアの活性化につながることを指摘されている⁹⁾。また、依頼されたスポーツボランティア活動への従事を通して自己変容が起き、消極的参加であっても学生の利益を還元できること¹⁹⁾、高い満足感を与えることができること²⁶⁾からも、大学からの依頼を受けてスポーツボランティア活動に従事した学生の利益を高める必要がある。特に、最後の修学時期である大学生であることを鑑みると、「将来の職業に役立つ知識や技術」や「社会についての新たな知識」を得るといった経験の場であり、今後スポーツ指導にあたる可能性のある体育会系部活動所属学生に対しては、「指導方法」や「参加者とのコミュニケーション」を磨くといった学びの場である必要があるだろう³¹⁾。また、ボランティア活動の満足感や達成感が高まれば、自発的に活動を継続するボランティアが増えることにつながるという観点からも、事前に活動従事者に対して希望をとった上でスタッフの配置を検討する、研修会を開催する、参加者との交流の多い活動に配属させるなどのスポーツボランティアの満足感を高めるためのマネジメント上の工夫を検討すべきである。スポーツイベントの開催にはスポーツボランティアが必要不可欠であるが、イベント運営者はスポーツボランティアを共に活動する「パートナー」として認識し³²⁾、スポーツイベントの成功と同時にスポーツボランティアに対する利益や満足感を還元できるような視野をもってイベントを運営する必要があるだろう。

5. 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界として、調査対象者のスポーツボランティア活動内容が明確に区分できない点が挙げられる。対象者が複数の活動に関与しており、活動による評価や満足感の差異を示すことができない。スポーツボランティアの評価や

満足感は活動全体に対するものなのか、スポーツボランティア中に起きた特定の事象の影響なのかを明確にすることができない。スポーツイベントのなかで中心的に携わった活動について明記を求める、活動後に自由記述を求めることで、スポーツボランティアの活動内容と満足感との関係を明確にする必要がある。同様に、気分状態が良好に改善された原因についても、スポーツボランティアの活動内容や活動量等と併せて検討する必要がある。本研究では気分状態と満足感との間に有意な相関関係があることが示されたが、先行する要因がどちらであるかは先行研究によって意見が異なることから、今後気分状態に影響を与える要因を明らかにし、データを蓄積していく必要がある。

また、分析対象者数が少ないことから、本来であれば性差やボランティア経験の有無によって分析を行うべき参加動機やボランティアによって得た利益を一括して分析をしている。特に、参加動機については性別、年代、ボランティア経験の有無によって有意な差があることが明らかとなっており¹⁷⁾、いくつかの要因によって参加動機と満足感の相関関係が異なる可能性が推測される。

さらに、今後のスポーツボランティア活動の継続意志やスポーツボランティア以外のボランティアに対する参加意志については調査を行っていない。ボランティア活動後の満足感は活動の継続意志を高めることが報告されているが、本研究ではボランティア継続や移行の可能性については言及できない。体育会系部活動所属学生がどのような活動であればスポーツボランティアを継続したいと感じるのか、またスポーツボランティア以外の地域のボランティア活動に活動範囲を拡大する可能性があるかについて調査を行う必要がある。

スポーツボランティアは「するスポーツ」や「みるスポーツ」を支えるだけでなく、スポーツを通してのまちづくりに寄与する可能性を有する¹⁸⁾。スポーツボランティア活動が、普段は

スポーツをする視点でスポーツに関わっている体育会系部活動所属学生がささえる視点への移動を経験する可能性を有する貴重な機会であること¹⁸⁾¹⁹⁾を念頭にスポーツボランティア活動と満足感に関する更なる調査が求められる。

参考文献

- 1) 文部科学省 (2010) 「スポーツ立国戦略—スポーツコミュニティ・ニッポン—」
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/rikkoku/1297182.htm (平成27年11月2日閲覧)
- 2) 一般財団法人東京マラソン財団「東京マラソン2014」
http://www.tokyo42195.org/2014/volunteer_outline/index.html (平成27年11月3日閲覧)
- 3) 仲澤 眞 (2002) 「スポーツボランティア活用の現状と課題」『体育の科学』第52巻第4号, 266-269頁.
- 4) 文部省体育局競技スポーツ課 (2000) 「スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究報告書」『スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究協力者会議』
- 5) 日本スポーツボランティア学会 (2008) 「スポーツボランティアハンドブック」明和出版.
- 6) 笹川スポーツ財団 (2014) 平成26年度 文部科学省『スポーツにおけるボランティア活動活性化のための調査研究 (スポーツにおけるボランティア活動を担う組織・団体活性化のための実践研究)』報告書.
<http://www.ssf.or.jp/research/report/report21.html> (平成27年11月3日閲覧)
- 7) 坂野純子, 矢嶋裕樹, 中嶋和夫 (2004) 「地域住民におけるボランティア活動への参加動機と満足感への関連性」『東京保健科学学会誌』第7巻第1号, 17-24頁.
- 8) 妹尾香織, 高木修 (2003) 「援助行動経験が援助者自身に与える効果: 地域で活動するボランティアに見られる援助成果」『社会心理学研究』第18巻第2号, 106-118頁.
- 9) 山口泰雄 (2005) 「生涯スポーツとイベントの社会学—スポーツによるまちおこし—」有限会社創文企画.
- 10) 徳永幹雄, 橋本公雄, 磯貝浩久, 高柳茂美 (1992) 「運動の爽快感とその規定要因(1)」『健康科学』第14巻, 9-17頁.
- 11) 松井くるみ, 原田宗彦 (2011) 「プロスポーツ観戦者の将来ファン行動に関する研究—感情と満足度に注目して—」『スポーツ科学研究』第8巻, 12-34頁.
- 12) 菊池章人, 岡出美則, 坂入洋右, 征矢英昭 (2014) 「東北被災地小学校体育への2分間の垂直跳び体操支援の試み」『筑波大学体育会系紀要』第37巻, 63-72頁.
- 13) 片山知美, 山内恵子 (2011) 「小児メタボリックシンドローム介入教室による心理的变化の検討」『ヒューマンケア研究学会誌』第2巻, 23-29頁.
- 14) 内田佑介 (2008) 「スポーツボランティアの継続参加意思を規定する要因に関する研究」早稲田大学大学院スポーツ科学研究科スポーツ科学専攻スポーツビジネス研究領域 修士論文.
- 15) 水野邦夫, 加藤登志郎 (2007) 「ボランティア活動への参加は個人の心理的成長に寄与するか?—ボランティア活動経験とパーソナリティ特性, 社会的スキル, 充実感, ボランティア活動観の関連性からみた一考察—」『聖泉論叢』第15巻, 141-156頁.
- 16) 妹尾香織 (2008) 「若者におけるボランティア活動とその経験効果」『花園大学社会福祉学部研究紀要』第16号, 35-42頁.
- 17) 松本耕二, 國本明德, 北村尚浩, 中野隆士 (2003) 「障害者スポーツイベントにおけるボランティアの参加動機—性別, 年代別, 活動経験別による比較—」『山口県体育学研究』第46巻, 11-20頁.
- 18) 山口泰雄 (2004) 「スポーツボランティアへの招待—新しいスポーツ文化の可能性」世界思想社.
- 19) 豊田則成, 金森雅夫 (2007) 「スポーツ・ボランティアを経験することの意味とは?—びわ湖大学駅伝にボランティア参加した本学学生の「語り」から—」『びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要』第4号, 9-18頁.
- 20) 坂入洋右, 木塚朝博, 征矢英昭 (2009) 「TDMS 二次元気分尺度」アイエムエフ株式会社.
- 21) E Gil Clary, Mark Snyder, Robert D. Ridge, John Copeland, Arthur A. Stukas, Julie Haugen, and Peter Miene. (1998) 'Understanding and assessing the motivations of volunteers: A functional approach.' *Journal of Personality and Social Psychology*, vol.74, no.6, PP.1516-1530.
- 22) 笹川スポーツ財団 (2014) 「スポーツライフデータ2014—スポーツライフに関する調査報告書—」, 笹川スポーツ財団, pp95「スポーツボランティア」

- 23) 伊藤忠弘 (2011) 「ボランティア活動の動機の検討」『学習院大学文学部研究年報』第58巻, 35-55頁.
- 24) 高橋信次 (2001) 「スポーツにおけるボランティア指導者の実態とその課題—これからのスポーツ振興の政策課題として—」『地域政策研究』第3巻第3号, 23-45頁.
- 25) 松本耕二 (1999) 「スポーツ・ボランティアの類型化に関する研究: 障害者スポーツイベントのボランティアに着目して」『山口県立大学社会福祉学部紀要』第5巻, 11-19頁.
- 26) 内藤正和 (2009) 「地域のスポーツイベントにおけるボランティア活動に関する研究—依頼型のボランティアに着目して—」『愛知学院大学心身科学部紀要』第5号, 7-15頁.
- 27) 田引俊和 (2005) 「知的障害者のスポーツ活動を支えるボランティアの参加動機に関する研究」『医療福祉研究』第1巻, 85-93頁.
- 28) 村田宣夫, 加藤 基, 清水輝夫 (2012) 「東京マラソン2011のボランティア活動に対する学生アンケート結果」『帝京大学スポーツ医療研』第4巻, 11-16頁.
- 29) 松岡宏高 (2008) 「スポーツビジネス叢書 スポーツマーケティング」原田宗彦編著, 大修館書店 pp79-80. 「概念装置としてのスポーツ消費者」
- 30) 徳永幹雄 (2005) 「教養としてのスポーツ心理学」徳永幹雄編, 大修館書店 pp120 「運動・スポーツで心の健康は高められるか」
- 31) 高村秀史 (2014) 「地域と連携したし総合型スポーツクラブにおける学生参加型プログラムの取り組み—ちびっこアジリティ教室を例として—」『日本福祉大学全学教育センター紀要』第2号, 87-97頁.
- 32) 文部科学省 (2015) 「スポーツボランティア・運営ガイドブック～スポーツイベントのボランティアを知る～」『公益財団法人 笹川スポーツ財団』<http://www.ssf.or.jp/research/report/report24.html> (平成27年11月3日閲覧)